平成30年度　研修報告書　第45号

元気な地域づくりをめざしてⅡ

～新時代へつながる地域活動とは～

「金津七夕竿灯行列」（角田市）

【大河原地区社会教育主事研究協議会】

発 刊 に あ た っ て

大河原地区社会教育主事研究協議会では，社会教育主事として，各市町の現場における住民の学びや感動体験をお手伝いする中で課題を見つけ，調査研究を行い，現状と課題をさぐり，その解決策を見出していく研修活動を行っております。

これまで多くの先輩，社会教育主事の方々は，町の境を飛び越え，社会教育のより良い形での推進を目指してこの研修活動を実践してこられました。そういった思いを胸に，この一年間，研修委員は調査研究に取り組みました。その成果がまさにこの研修報告書です。この研修報告書を手に取る方々すべてに，今日までの積み重ねられた歴史と　“今”　社会教育の現場で働く，我々社会教育主事の熱意が伝わることを祈っています。

さて，この研修報告書は昭和４８年の第１号の創刊から今年，４５号の発刊を迎えました。私事ではありますが，平成７年に社会教育主事と書いてある辞令をいただいてから，ほぼ四半世紀。世の中もすっかり模様替え。学校教育との反意語にとらえられていた社会教育は，週休２日，総合学習の実践などにより双方の歩み寄りが進み，学社連携，学社融合と手を携えるようになり，さらには協働教育，協働による教育活動とめまぐるしく変化していきました。今，仕事で思い悩むときがあっても，これらの研修報告書は，その答えやヒントをくれることがあります。　“作ったら終わり”　ではない私たちの研修報告書。どんな変化の中でも，絶えること無く，その時々の社会教育主事が取り組んだ成果が形として残ることは，本当に素晴らしいことです。今回の研修報告書もこれまでに負けないものになったのではないかと思います。

最後に，１年を通して指導していただきました宮城県大河原教育事務所の皆様をはじめ，ご協力いただきました方々や関係各所に心より深く御礼を申し上げるとともに，今年度の研修に昼夜を問わず熱心に取り組んだ各市町の研修委員の方々のご努力に対し心から敬意を表し発刊のことばといたします。

平成３１年３月

大河原地区社会教育主事研究協議会

会　長　柴田町社会教育主事　木村　正人

発 刊 を 祝 し て

宮城県大河原教育事務所　　所長　　前田　正

各市町において生涯学習・社会教育の振興・充実に向けて日々精励しておられます大河原地区社会教育主事研究協議会の皆様方には，その御努力に敬意を表します。また，今年度も，研修委員の皆様が粘り強く確実な研修を続けられ，研究の成果を「研修報告書４５号」として発刊されますことを心よりお祝い申し上げます。

さて，周知のとおり，現在の我が国には様々な課題が山積していると言われております。その中でも，人口の減少と流出による地域力の減退は特にひっ迫した課題であると感じております。その解決のためには，その地域に住む様々な人々が知恵を出し合い，将来を語り合うことが必要であると思います。もう一度自分の住んでいる地域の良さを見直し，その良さを活かした取組を考えていくことが，郷土への誇りを高め，延いては地域再生につながっていくものと考えます。平成１７年度から協働教育として本県で注力し，昨年度から名称を「地域学校協働活動」と変えて行っている活動も，地域住民と学校が協働して地域をつくっていく取組です。ともに知恵を出し合い，そこに住む子供たちと地域の未来を共有しながら，地道で確実な取組を続けていただけると幸いです。

大河原地区社会教育主事研究協議会では，昨年度から「元気な地域づくりをめざして」というテーマのもとに，今年度も同テーマで地域の活性化や地域活動の必要性に焦点をあてて，熱心な研究をなされております。昨年度は，大河原教育事務所管内の中学校２年生とその保護者にアンケートを取り，多くのデータの集積に努められました。この内容を吟味した社会教育的調査は，今後の事業開発等に有効なものであります。そのデータは「研修報告書４４号」に詳しく掲載されております。

今年度は，そこから一歩飛躍して，地域づくりや地域活性化のための方策等を研究したと伺っております。社会教育主事という“実践者”としての経験を活かしながら，地域の大切さを認識し，活性化のヒントをこの報告書で示してくれるものと楽しみにしております。と同時に，１年間の研修で一回り頼もしくなった貴協議会員の皆様が，各市町に戻って更なるすばらしい活躍を見せていただけるものと大いに期待しております。

結びになりますが，本書の発刊にあたり御尽力なさった研修委員の皆様，そして貴協議会及び会員の皆様を支えていただいている大河原教育事務所管内各市町教育委員会教育長殿をはじめ，関係する全ての皆様に心から感謝を申し上げますとともに，管内の生涯学習・社会教育の振興と貴協議会の益々の御発展を祈念いたしまして，発刊を祝しての言葉といたします。

目　　次

発刊にあたって　・・・・・・・・・・・・・・　大河原地区社会教育主事研究協議会　会長　木村　正人

発刊を祝して　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　宮城県大河原教育事務所　所長　前田　　正

◇　研修テーマと経過について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

◇　研修テーマ設定の背景について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

◇　アンケート調査の分析と考察について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

◇　我々が考える地域活動の活性化とは　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

◇　モデル事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

◇　先進地研修視察報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

◇　まとめ　・・３３

◇　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５

研修テーマと経過について

研修テーマと経過について

1　研修テーマ

元気な地域づくりをめざしてⅡ　～新時代へつながる地域活動とは～

2　研修の目的

①大河原教育事務所管内の青少年が関わる地域活動について，その現状や課題を検証し，よりよい地域活動を探る。

②大河原教育事務所管内の各市町における地域活動の活性化に向けた手立てを考える。

3　研修の方法

大河原教育事務所管内の各市町における地域活動に関するアンケート調査結果の分析・考察を通して見えてきた課題の改善策を探る。

4　研修日程と経過

月　日 （曜日）	会　議　名	会　場	内　容
4月27日 （金）	○社会教育主事研究協議会総会 ○研修委員会準備委員会	合同庁舎	平成29年度事業・会計決算報告 平成30年度事業・予算・役員改選等 研修委員会役員の選出
5月11日 （金）	○第１回研修委員会 ○第１回社会教育主事研究協議会	柴田町	研修テーマの検討・研修計画・研修内容の検討等　　話題提供（七ヶ宿町）
6月　1日 （金）	○第２回研修委員会 ○第２回社会教育主事研究協議会	合同庁舎	研修の基本構想, 先進地視察地の検討
7月12日 （木）	○第３回研修委員会 ○第３回社会教育主事研究協議会	蔵王町	研修内容の検討, 先進地視察地の選定 話題提供（柴田町）
8月30日 （木）	○第４回研修委員会	合同庁舎	研究内容の検討 先進地視察内容の検討
9月11日 （火）	○先進地研修視察 （山形県東置賜郡高畠町・川西町）	山形県内 ２箇所	先進地の地域活動事業の状況調査等
10月10日 （水）	○第５回研修委員会 ○第４回社会教育主事研究協議会	白石市	研修視察の反省，研修内容の検討等 話題提供（蔵王町）
11月22日 （木）	○第６回研修委員会 ○第５回社会教育主事研究協議会	合同庁舎	研修報告書の検討等
12月　4日 （火）	○第７回研修委員会	合同庁舎	研修報告書の検討等
1月25日 （金）	○第８回研修委員会 ○第６回社会教育主事研究協議会	村田町	研修のまとめ，研修報告書の検討等 話題提供（白石市）
2月14日 （木）	○第９回研修委員会	合同庁舎	研修報告書の校正等
3月　8日 （金）	○第10回研修委員会 ○第７回社会教育主事研究協議会	丸森町	研修報告書の校正・まとめ・反省等 話題提供（村田町）

研修テーマ設定の背景について

研修テーマ設定の背景について

近年，我が国では人口減少や少子高齢化が深刻な問題となっている。急速に進む社会環境の変化や価値観の多様化から，人々が地域課題を共有し，その解決を「学びのテーマ」とすることが困難になってきた。個人の「地域を守り伝える」「地域を良くする」「地域の一員である」という意識が薄まってきているのである。このような状況の中，地域の担い手の高齢化や連帯感の希薄化などにより，暮らしを維持・存続するのが危ぶまれる地域も存在する。今日，地域コミュニティの再生や地域の活性化は強く求められるものとなっている。

地域社会では，青少年の健全育成，福祉・医療，防災などといった様々な分野の問題が生じているため，行政だけではきめ細やかな対応が難しく，住民による課題解決へ向けた活動が必要である。多様化する地域課題を解決するには，地域のために行う様々な社会的活動，いわゆる「地域活動」の活性化が重要であると我々は考えた。地域活動は，同じ志の人々が集まり課題解決に向けて学び合う「学習活動」の面もある。生涯を通じて学習し活動することは，個人だけでなく地域の暮らしも豊かにするという大きな役割も期待できる。

このような活動は，継続して行われることが望ましいが，地域の担い手不足などが原因となり，活動の継続が困難となることは少なくない。活動を継続させるためには，人材発掘や後継者の育成は欠かせないものとなってくる。

現状から，我々は，地域社会の将来を担う青少年こそ地域活動に参加・参画することが重要だと考えた。青少年が参加・参画することは，その青少年の人間性を成長させるだけではなく，将来地域で活躍できる人材を育てることにもなると考えたためである。

そこで，昨年度は青少年の現状と地域活動に対する意識を把握するため，大河原教育事務所管内の中学校第２学年生徒及びその保護者を対象に「青少年の地域活動に関する意識調査」を実施した。集計結果から地域活動への関心や参加状況，それに影響するであろう余暇時間の使い方等を把握することができた。また，生徒・保護者ともに「地域活動に対する興味関心はあるが様々な理由により参加できない」「参加しているが負担に感じている」といった意見もあり，いくつかの課題も見えてきた。

今年度の研修委員会においては，昨年度の研修テーマを引き継ぎ，意識調査の結果をより深く分析・考察していく。さらに，「持続可能な活動」に焦点を当て，これからの地域活動の在り方や課題解決に向けた方策を探ることとする。

アンケート調査の分析と考察について

アンケート調査の分析と考察について

平成２９年度に実施した「青少年の地域活動に関する意識調査」（表１）では，中学校第２学年生徒とその保護者から家庭，地域，学校に関する現状と意識を把握し，社会状況の変化に伴う生活環境の変化や地域活動の意識など課題が判明した。

研修委員会では，それらの課題を元に「地域活動」との関連性を踏まえた形で調査し，生徒とその保護者の意識調査を詳細に分析し，課題解決の方策を探ることとした。

アンケート調査の分析では，平成２９年度の調査結果を基に行い，一部クロス集計調査を行った。また，意識調査の結果を家庭，地域，学校の３つに分類し，下記の調査項目を軸に検討を行った。それぞれの仮説等は，後述の「家庭・地域・学校」の頁のとおりである。

「家庭」保護者が考える地域活動
「地域」生徒とその保護者の地域への関心
「学校」生徒の部活動の頻度と地域活動の参加意識

※後述のアンケート調査の分析と考察について

グラフ図は，平成２９年度に実施した「青少年の地域活動に関する意識調査」（研修報告書第４４号）を掲載した。また，グラフ図に表示する「その他」の内容や「自由記述」は，一部紹介とした。

表１「青少年の地域活動に関する意識調査」　アンケート調査の概要　（研修報告書第４４号より）

１　調査目的

近年，地域や周囲に無関心な人々が増え，無縁社会といわれるほど深刻化している。しかし，東日本大震災以後，人々が「つなぐ」「つながる」ことの必要性を感じ始めるとともに，地域活動への参加意義が一段と高まり，活性化するために中心的役割を担う人材育成が必要視される。特にこれから社会の中心として活躍しようという時期にあたる青少年の人間形成に関しては重要であると考えられる。

そこで，研修テーマとして「地域活動の活性化」を取り上げ，次世代を担う青少年に着目し，これからの地域の活性化に及ぼす関係性を考察するため，管内の中学校第２学年生徒とその保護者を対象とした地域活動に対する意識調査を実施する。

２　調査の時期

平成 29 年 11 月 7 日（火）～ 11 月 29 日（水）

３　調査の対象

大河原教育事務所管内の中学校第２学年生徒及びその保護者

（白石市，角田市，蔵王町，七ヶ宿町，大河原町，村田町，柴田町，川崎町，丸森町）

４　調査の方法

調査用紙　生徒用・保護者用を作成

調査方法　各市町の中学校第２学年生徒とその保護者において，無記名で調査。

５　標本数

生　徒　1，548

保護者　1，548

６　有効回答数

生　徒　1，339（86.5%）

保護者　1，129（72.9%）

７　その他

各設問の数値などは，回答のあったもののみを有効とするため，設問ごとのサンプル数は異なる。

【家庭におけるアンケート調査の分析と考察について】

家庭教育とは，家庭内で行われる教育行為のことであり，一生涯にわたり発達段階，年齢等に応じ，自らの資質のために持続的に学習する生涯学習の一つである。たとえば，親が子供に対して行う“しつけ”などがあり，親や保護者が子供に対して施すものである。教育の基盤となることを親や保護者が認識し，主体的に子供の教育を行うとともに，家庭の教育力の向上に努めることが重要である。

近年，地域コミュニティ力の希薄化により，他者と関わる機会が減少している。また，身近な学びや相談の機会が乏しくなっており，保護者が他の保護者や地域との交流の中で得てきた家庭教育に関する生きた知識・ノウハウ，考え方を身に着ける機会が少なくなっている。

ここでは，前回調査で集計した保護者アンケートをもとに，昨今の保護者たちが地域活動に対してどのような考えを持っているのか検討したい。

分析１－１　最近，地域活動に参加したか，その理由はなにか。

〇約６割の保護者が最近，地域活動に参加したと回答している。参加率としては少なくないように見て取れるが，その内容やきっかけはどのようなものか。

図１　最近，参加したことがある地域活動（あてはまるもの全て）

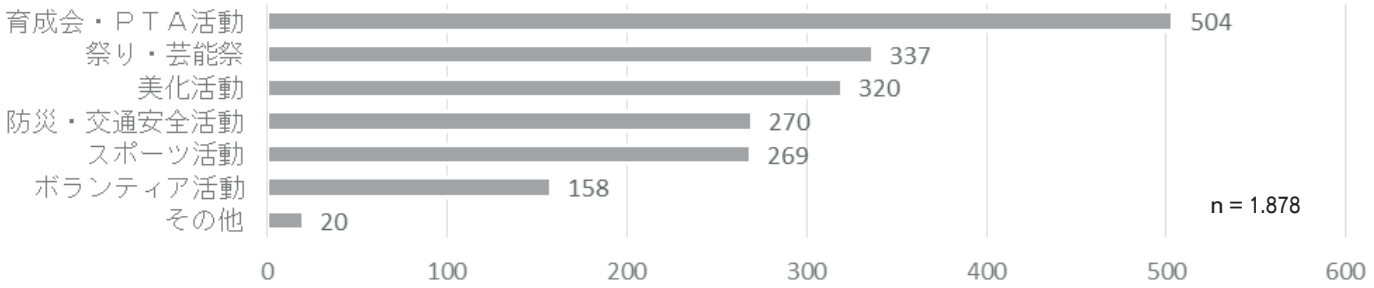
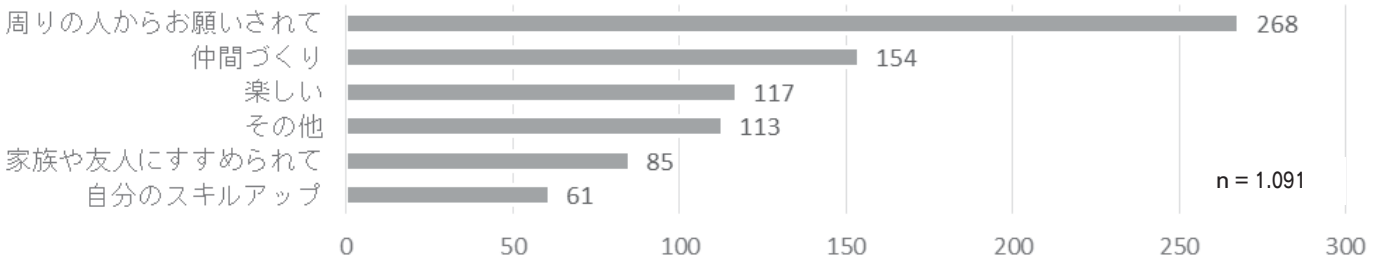


図２　地域活動に参加した理由（２つまで）



〈図１，２から〉

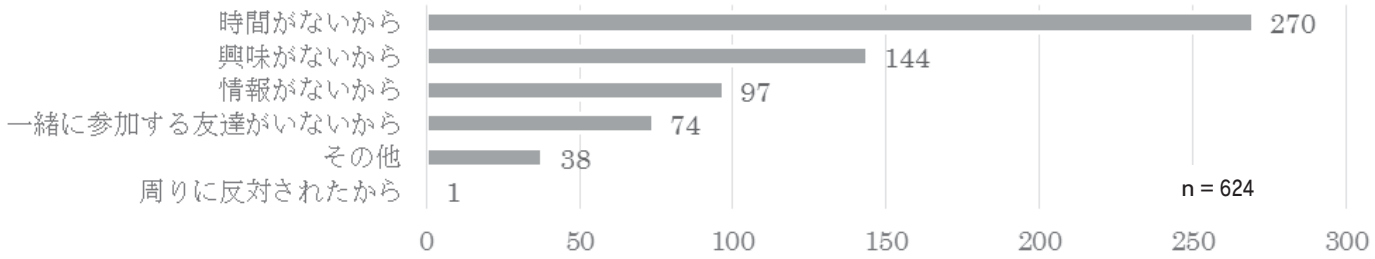
〇最近参加した地域活動のうち「育成会・ＰＴＡ活動」が３割弱を占めている。

〇参加した理由については「周りからお願いされて」が全体の２割を占めており，自由記述では，「役員だったから（同１４）」「順番が回ってきたから（同５）」「義務だから（同４）」といった記載が多く見られる。

分析１－２　地域活動に参加しない理由について

○地域活動に参加していない理由はなにか。最近，地域活動に参加していないと回答した保護者の視点。

図３　地域活動に参加していない理由（２つまで）



〈図３から〉

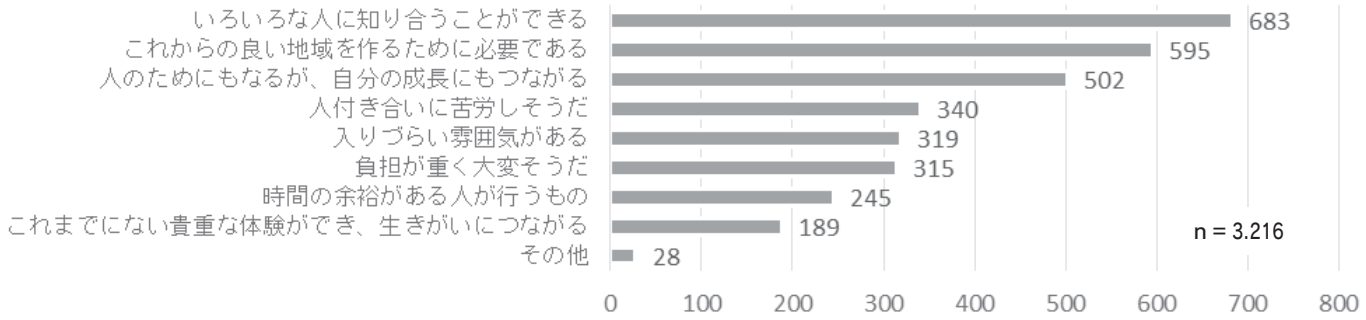
○「時間がないから」という理由が４割以上を占めており，次いで「興味がないから」といった意見が出ている。

○自由記述の欄には「参加したいが仕事が忙しいから」という前向きな記述もあれば「必要性を感じないから」「楽しくはないから」といった地域活動に対して否定的な意見もあった。

分析１－３　地域活動について持っている考え

○参加の有無にかかわらず，地域活動という視点から地域に関わることについてどのような考えを持っているか分析したい。

図４　地域活動に対して，どのような考えを持っているか（あてはまるもの全て）



〈図４から〉

○選択制の回答からは「いろいろな人に知り合うことができる」「地域のために必要」といった前向きな意見が上位を占めている。

○しかし，自由記述には「かかわりたくない」「考え方を受け入れてくれない」「若い人がいない」「スポーツ大会などは人数少なく大変そう」「参加できる一部の人ばかりに負担がかかっている」といった，マイナスイメージの記述が多く見られ，やはり「できれば参加したくない」といった印象を持っている人が多いようである。

分析１－４　地域活動への意見

○地域活動への意見を自由に記述いただいた内容から，どのような思いを持って地域活動と関わっているのか，なぜ関わらないのかを検討したい。

表１　地域活動についての意見など（同意見の多いものを一部抜粋）

・若い世代（子育て世帯・働く世代）には負担が大きい。（同１４）
・新しい意見を取り入れない。（同５）
・地域活動に関する情報が不足している。（同５）
・ほぼ強制参加となることに不満がある。（同５）
・新参者（転入者・若い世代）が入り込みにくい（同５）
・もっと気軽に参加できるようにしてほしい（同５）
・もっとイベントを増やしてほしい（同３）
・参加させたくても送迎が難しい（同２）

〈表１から〉

○「負担が大きい」や「新しい意見を取り入れない」など，マイナスイメージが目立つが，「地域活動に関する情報が不足している」など，行政の力不足が否めないものもある。

分析１−５：子供の地域活動参加の意識

○子供の地域活動への参加について，理解が有るか確認する。

図５　自分の子供が地域活動に参加することについてどう思うか

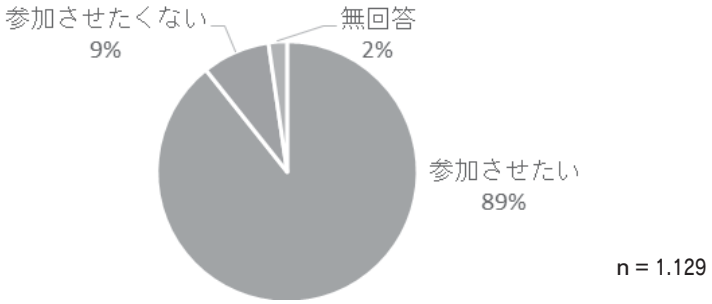
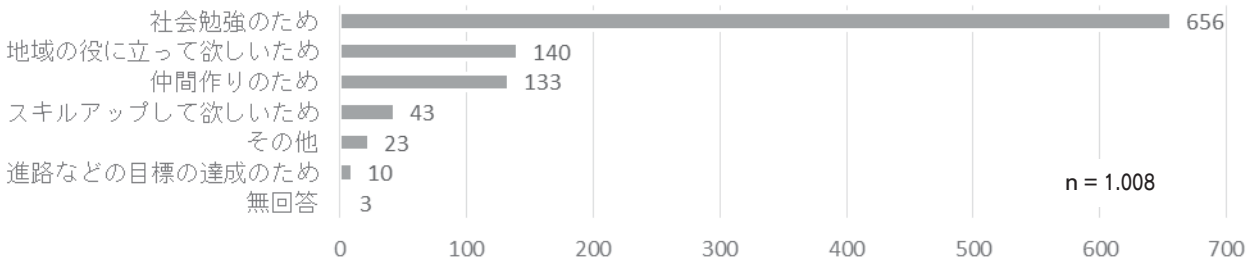


図６　自分の子供を地域活動に参加させたい理由



〈図５，６から〉

○自分の子供を地域活動に参加させたい保護者は約９割で，子供の社会勉強などのため，参加させたほうがよいと考えており，参加への理解はあると考えられる。

〈まとめ〉

アンケートの自由記述の結果からも，地域活動に参加した理由として最も多いのは「周りにお願いされたから」であり，自由記述には人間関係について「考え方を受け入れてくれない」「参加できない場合など断りにくい雰囲気がある」など，後ろ向きな意見が多くみられた。教育に関する生きた情報を，地域コミュニティから得るといった意識や，周囲の保護者と情報交換を積極的に行うといった考えは，やはり稀薄になっているものと推察される。

地域活動に参加しない理由には「時間がないから」が最も多く，自由記述では「仕事が忙しい」「時間がない」「参加する余裕がない」といった回答が見られ，地域活動に参加したり，家庭教育の知識を得たりする時間が，多忙化によって困難になっていることも考えられる。

アンケートの中には，地域活動への参加について，否定的な意見も見られたが，分析１−５を参考にすると，自分の子供には参加してほしいといった意見が多数であり，自由記述においても「地域の一員としての自覚を持ってほしいから」といった前向きな意見が出ている。地域活動が子供たちの成長に寄与し，次代の地域を担うという認識があるものの，前述した「人間関係」や「多忙化」により足が遠のいていると考えられる。また「子は親の鏡」ということわざのあるとおり，家庭（親）といった，環境に起因する可能性も切り離すことはできない。

地域活動＝めんどうくさい，時間や手間かかる，という理由で地域コミュニティから足が遠のくのであれば，必要としていることを，必要としている者たちが集まり，主体的に学びあえる機会や，情報の提供，相談対応が必要になってくると思われる。また，我が子が地域活動への参加を通し，学ぶ機会を持ってほしいと保護者が考えるのであれば，自身が積極的に地域活動へ参加し「親の背中を見せる」ことで，子供たちの地域活動に対するモチベーションも向上するのではないだろうか。

【地域におけるアンケート調査の分析と考察について】

これまでの社会教育は歴史的に自治会・婦人会・青年団などの地域団体に大きく依存して展開されていた。これらの団体は地域住民と行政をつなぐだけではなく，住民生活に対する相互扶助，伝統文化の維持，地域課題の解決といった機能も果たしてきた。

しかし，産業構造の変化，都市化・過疎化，価値観の多様化など社会環境が変化することにより，地域における人のつながりや連帯感，支えあう意識が希薄になり，若い世代の加入率が低下するなど，地域の力は衰退する傾向が見られている。

前回の「青少年の地域活動に関する意識調査」の保護者の回答では，地域活動の重要性は認識しているものの，役員だからという理由や義務感により参加しているというものが多く，積極的に参加できていないことが課題としてあげられている。

一方で，保護者は子供を地域活動へ参加させたいと考えており，中学生の回答でも地域活動について前向きであった。アプローチの方法により，地域活動への参加が促せるのではないかと考え，分析をすることとした。

分析２－１：生徒の地域への意識と余暇時間の使い方

生徒が地域に対しどのような意識を持っているか推察する。

図１　自分の住む地域が好きか

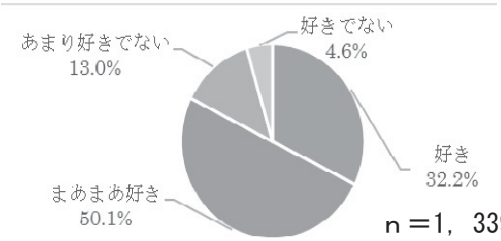


図２　地域活動に参加してどのようなことを経験したり感じたりしたか（２つまで）

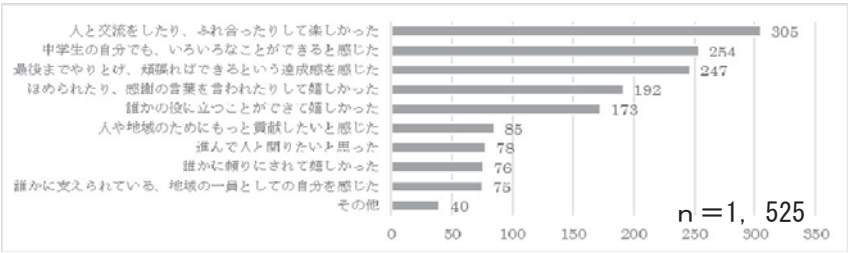


図３　平日の放課後の使い方について多いもの（２つまで）

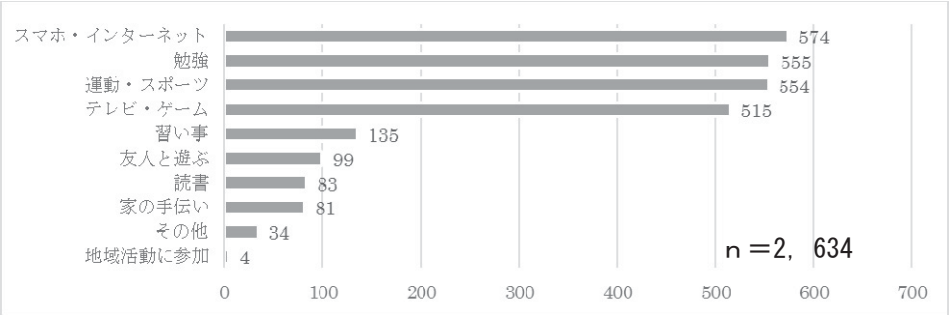
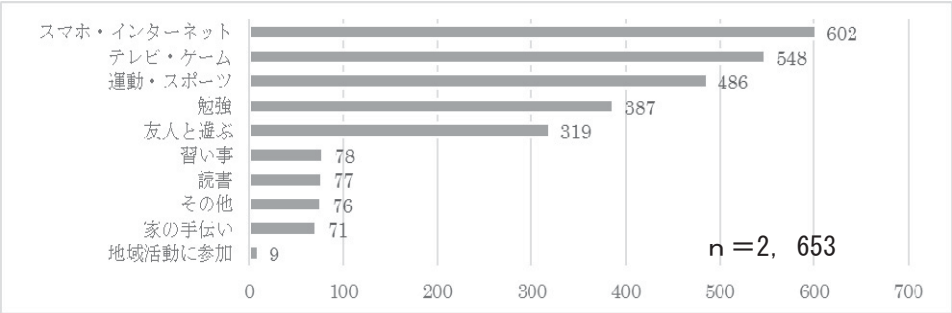


図４　休日の使い方について多いもの　（２つまで）



〈図１～４から〉

○地域活動に対し，前向きな意見を持ち，地域への愛着のある生徒は多いものの，勉強や部活が忙しく，余暇時間には他にもやること・やりたいことがあり，地域活動に参加する時間が取りにくい状態となっている。

分析２−２：生徒の地域活動に参加しない理由

地域活動に参加していない生徒はどのような理由で参加していないか確認する。

図５　中学校入学後，地域活動に参加したことがあるか

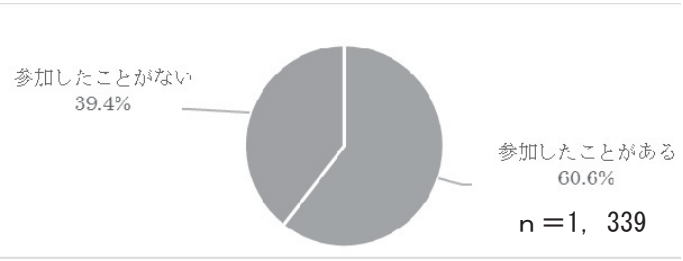


図６　今後，地域活動に参加したいか
（図５で参加したことがない生徒のうち）

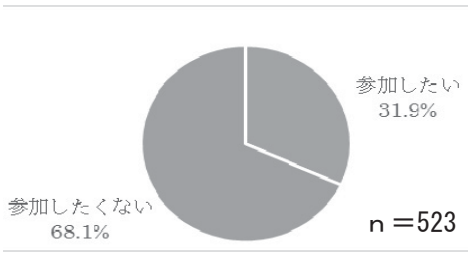
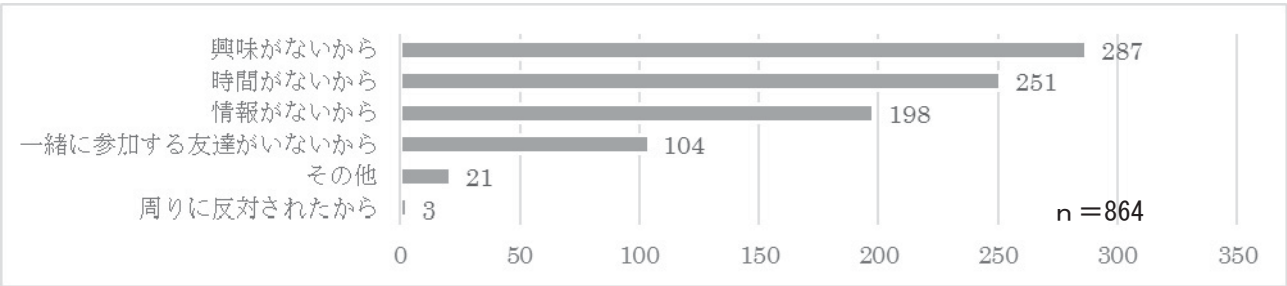


図７　地域活動に参加していない理由　（図５で参加していない生徒のうち，２つまで回答可）



〈図５～７から〉

○地域活動に参加していない生徒が約４割おり，そのうち７割が参加したくないと考えている。その理由としては「興味がないから」「時間がないから」「情報がないから」で，情報の発信方法を工夫すれば興味を引ける可能性はあると考えられる。

分析２−３：保護者の地域活動への意識

保護者は地域活動についてどのように考えているのか推察する。

図８　最近，地域活動に参加したことがあるか

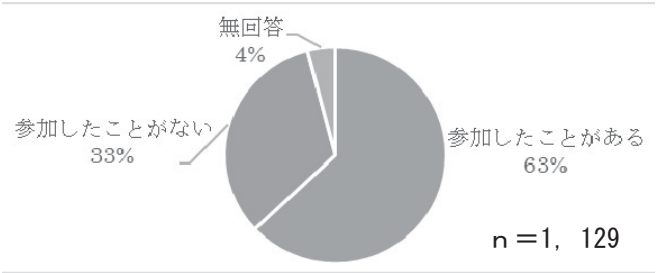
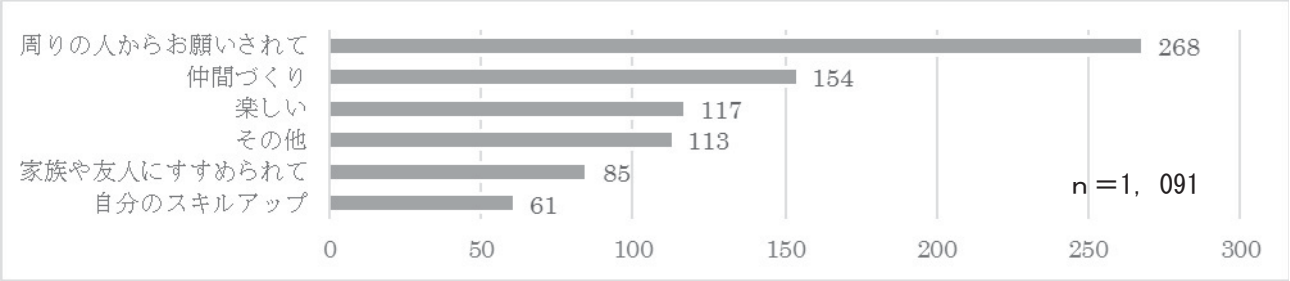


図９　地域活動に参加した理由（２つまで）



※その他意見に役員だったから，順番が回ってきたからなどの記述が多い。

〈図８～９から〉

○地域活動の必要性は理解しているものの，活動することには負担感があり，積極的に参加できていない。参加していない保護者は約３割いる。

〈まとめ〉

分析２-１～２-３で得られた結果，地域活動について前向きな生徒は多いものの，余暇時間にやることが多く，地域活動に参加するという選択を取りにくいという現状があり，参加していない生徒は興味・時間・情報がないため参加していない。また，保護者は地域活動に対し，負担感は抱えているものの，子供の成長にとって必要であるという考えを持っている人が多いことがわかった。

さらに，今回の意識調査の自由記述に目を向けると，居住年数の長い年配の世代は若い人・新しく来た人がいない，参加しないとして今後の地域活動力の低下を懸念する一方，若い世代・新しく来た人は意見が取り入れられない，活動に入りにくいという意見が多く見られた。

これらのことから，地域活動へ参加することへの下地はある程度できていると考えることができる。地域活動を活性化していくためには，まず，地域イベントなどの情報の発信方法を工夫し，若い世代や新しく地域に入った人が情報を目にすることができるようにすること。参加した人が意見を言いやすい環境を作るよう努めることが，地域活動へ参加しない人へのアプローチとなるといえるのではないだろうか。

【学校におけるアンケート調査の分析と考察について】

近年，一般的に言われている青少年の環境を見ると，特に情報や科学技術の進歩により，多くの人との関わりや，自然などと直接触れ合う体験の機会が乏しくなっている。このため青少年に対し，地域活動など多様な体験活動の機会の充実を図ることで，心豊かな人間性や社会性，自ら考え行動する力などを培っていくことが必要であると言われている。そして，学校内では，いじめ，校内暴力，引きこもりなど青少年をめぐり様々な問題が生じており，子供たちの精神的な自立の遅れや社会性の不足などが問題視されている。このような中で，青少年に社会の一員としての意識や，他人を思いやる心など豊かな人間性を育んでいくためには，社会奉仕体験活動，自然体験活動など様々な体験を積み重ね，社会のルールや自ら考え行動する力を身に付け，自立や自我の確立に向けて成長していくことが求められている。

前回の「青少年の地域活動に関する意識調査」では，地域に対しての愛着度はあるものの，平日の放課後や休日は部活動などで多忙であり，インターネットやスマートフォンの普及により，それらに時間を費やしていることが明らかになった。

今回は，部活動の頻度と地域活動への参加について，何らかの関係性があるのではないかと仮説を立て，分析をすることとした。

分析３－１　部活動の頻度と地域活動への参加意識について

○部活動が多忙との回答が多数あることから，部活動の頻度と地域活動への参加についての関連性について把握したい。

図１　中学校入学後，地域活動に参加したことがあるかと部活動の頻度の関係性

選択項目	総計		週１～２回		週３～５回		週５回以上		参加していない		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
参加したことがある	803	60.6%	9	33.3%	162	51.1%	615	64.3%	15	45.5%	2	40.0%
参加したことがない	523	39.4%	18	66.7%	150	47.3%	334	34.9%	18	54.5%	3	60.0%
無回答	13	－	0	0.0%	5	1.6%	8	0.8%	0	0.0%	0	0.0%
合計	1,339	－	27	100.0%	317	100.0%	957	100.0%	33	100.0%	5	100.0%

〈図１から〉

○週５回以上部活動をしている生徒の約６割が地域活動に参加したことがある。

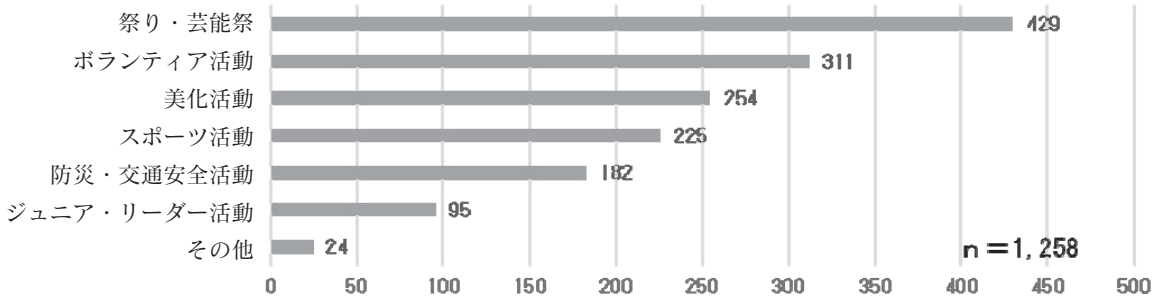
○地域活動への関わりについて，約６割が地域活動へ参加したことがあり，残り４割が参加したことがない。

○部活動の頻度が少ない生徒ほど，地域活動への参加割合が減少している。

分析３－２　参加した地域活動について

○地域活動に参加した中学生がどのような活動へ参加したのかを把握し，今後の参考へしたい。

図２　中学校入学後，参加したことがある地域活動（あてはまるもの全て）



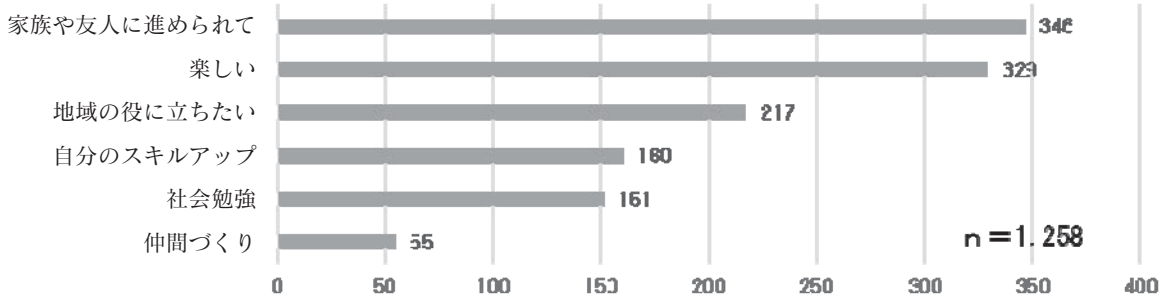
〈図２から〉

○「祭り・芸能祭」への参加が多く，次いで「ボランティア活動」となっている。
　イベント関係等の活動であれば，参加しやすいと思われる。

分析３－３　参加した経緯について

○参加した経緯について，どのような理由や動機があったのか考えてみたい。

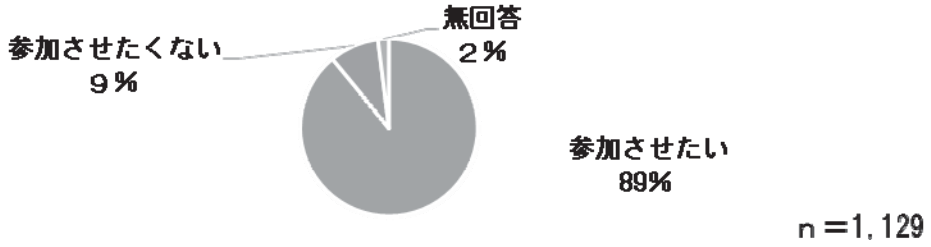
図３　地域活動へ参加した理由（２つまで）



〈図３から〉

○「家族や友人にすすめられて」が多数あった。次いで「楽しい」との結果であった。

図４　自分の子供が地域活動に参加することについてどう思うか



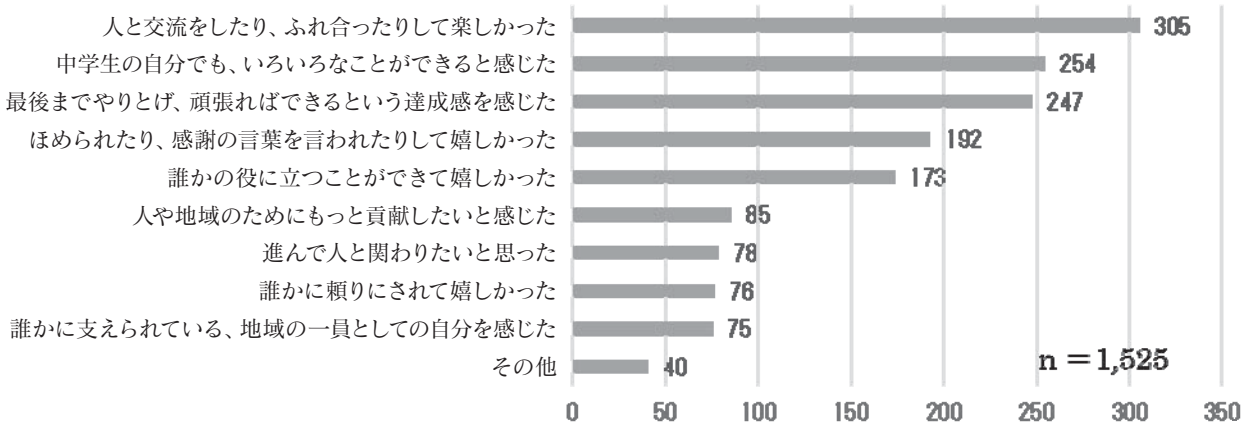
〈図４から〉

○保護者へ自分の子供が地域活動に参加することについて質問した回答にも，約９割の保護者が参加させたいと思っている。理由としても，社会勉強の為や，地域の役に立ってもらいたいとの回答が多数であり，保護者は参加へ前向きに考えていることがわかる。

分析３－４　地域活動に参加してみての生徒の思い

○地域活動へ参加してみて生徒は何を得ることができたのか把握したい。

図５　地域活動に参加してどのようなことを経験したり感じたりしたか（２つまで）



〈図５から〉

○上位の回答から「人と交流したり、ふれ合ったりして楽しかった」「中学校の自分でも、いろいろなことができると感じた」「最後までやりとげ、頑張ればできるという達成感を感じた」の順であった。また，前回の調査結果から出た，その他の回答からも，学校行事だった，部活動で出ることになったとの回答もあったことから，自主的に参加したわけではなくても，その他のきっかけから参加してみて，地域活動が自身にとって良い経験になると感じたとも考えられる。

〈まとめ〉

分析２では，学校におけるアンケート調査の分析と考察，課題に関して意識調査から得たデータをもとに分析を進めた。

「部活動の頻度」と「地域活動への参加傾向」を比較した結果から，部活動の頻度が少ない生徒ほど地域活動への参加の割合が減少していることが分かった。そして，生徒の地域活動への参加の多くが，祭りや芸能祭が多数となっており，次いでボランティア活動となっている。参加した理由については，学校行事や部活動で行うことになったからや，親や友人のすすめからなど，自分以外からの背中の後押しも活動への参加の理由になっているとも思われる。そして，地域活動へ参加していない生徒からの上位の回答も，「興味がないから」「時間がないから」「情報がないから」の回答順だった。きっかけは様々であるが，そこから参加したことで地域活動のやりがいや楽しさを知ることができるのではないかと考えられる。

我々が考える地域活動の活性化とは

【我々が考える地域活動の活性化とは】

これまで見てきたように，家庭・地域・学校において，時代の変化とともに様々な課題が出てきていることがわかった。その課題に対して，我々はどのように対処し何を目指して行けばよいのか，また我々が目指す地域活動の活性化とはどのような姿なのか，今まで研修委員会で議論を重ねてきたものを整理し確認することとする。

「地域活動」の「活性化」と聞き，初めは参加者の数が全てというイメージがなかなか抜けず，「今は地域で活動する若い人が少なくなってきた」「昔はたくさん地域で活動していた」「そういうものだった」という回想に終始していた。しかし，アンケートの結果が現実であり，子供は少なく，高齢者が多い，人口は減少していく一方の現代社会の中で地域を活性化させていくことを我々は目指している，と気づくことが出来た。アンケートの結果から，ネットやスマートフォンの使用により中学生の時間が無くなっているという部分は否定できない。しかしこれからの社会でそれらを生活から切り離すことは出来ず，共存していく方法を考えるしかないのである。

我々の議論の中で，地域活動の活性化について３つの視点が浮かび上がってきた。「興味のない人の参加が増えること」「人との関わりが増えること」「活動の効果が地域全体へ波及するもの」の３つである。また，目指すべきところとして「持続可能な活動」という目標を定めた。持続可能とは，資金面，後継者等人材育成の面等全てを含むものである。

「興味のない人の参加が増えること」「人との関わりが増えること」

中学生の人との関わりというものが，これまでは親，学校，部活等に加えて地域との関わりが存在していた。しかし，ネットやスマートフォンの使用に中学生の時間が多く使われているということから，現在では地域との関わりが限定的になり，インターネット上，ＳＮＳ等でのバーチャルな人間関係が増えていると予想される。

このような情報化の進展，社会の変化について，平成２８年１２月２１日中央教育審議会答申では，「２１世紀の社会は知識基盤社会であり，こうした社会認識は今後も継承されていくものであるが，近年，情報化やグローバル化といった社会的変化が，人間の予測を超えて加速度的に進展するようになってきている。とりわけ第４次産業革命ともいわれる，進化した人工知能が様々な判断を行ったり，身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が，社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされている。[1]」とされている。さらにこのような社会の中で，「子供たち一人一人が，予測できない変化に受け身で対処するのではなく，主体的に向き合って関わり合い，その過程を通して，自らの可能性を発揮し，よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である。[2]」と述べている。バーチャルな人間関係が多くなっていることに加え，人工知能が様々な場面に登場し職業そのものも変化してくる時代において，「子供たちは，変化を前向きに受け止め，社会や人生を，人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくことが期待され[3]」ているのである。人間ならではの感性を働かせるためには，人間同士の付き合いが不可欠である。また，自らの生

---

[1] 平成２８年１２月２８日中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】」第２章
[2] 同上
[3] 同上

き方の見本となる大人の姿は，様々な人との関わり合いの中から見ることができ，そこから様々な生き方があるということを学ぶことが出来る。そのため，学校や家庭だけでなく，地域で様々な人と関わることが，これからの時代を生きる子供たちの成長につながっていくと考える。上で引用した中教審答申は学校教育での話であるが，目指すべき子供たちの成長には社会教育や地域の力こそ必要なのではないだろうか。地域に根ざした生き方ももちろん多く存在しており，そのような姿を見せることによって，地域に戻り，地域を担う人材として成長してくれることが地域にとっても一番必要なことではないだろうか。

以上のことから，人間関係，人との関わりを増やすことが地域活動の役割であると考え，その活性化の視点として，興味のない人の参加を増やすこと，人との関わりを増やすことを挙げた。

「活動の効果が地域へ波及するもの」

地域活動を行っている事例は多くあるが，その活動を行った団体のみ，地区のみ等で終わってしまっている場合もある。活動に参加する人を集めるということが，現在はどの団体，地区でも苦労していることとなっている。しかし，これから本格的に人口が減り始める中，ひとつの団体や地区等で，それも同じような他の団体や他の地区でも同じ内容の活動をしていくことは必然的に難しくなっていくと考えられる。それぞれの活動の人数が少なくなってきた時，他の地区や団体と一緒に開催することで，人数も増え，他との交流も生まれるなど，１回の開催でどちらにもメリットがある，そのような開催の仕方がこれから必要になると考えられる。

学校が主導するボランティア活動を地域の行事と共に行い，地域の人と一緒に活動する等，学校の活動の効果が地域に波及している事例も多い。学校の生徒は地域の人との交流ができ，地域の様々な大人の姿を見ることが出来る。地域の人からしても，地域の学校にどこのどんな生徒が通っているのか顔が見え，普段からの見守りの目が変わってくるだろう。何より地域の行事に生徒が加わることで賑やかになり，運営の人手としても大きく役に立っている。

研修視察で訪れた山形県川西町のきらりよしじまネットワーク（以下きらりよしじまとする。）では，小学校の児童が登下校時に通学路で高齢者にあいさつを行う活動を行い，高齢者の見守りの一助を担っている。小学校のうちから，本人達にボランティアの意識がなくても人の役に立つ経験をすることができ，さらに地域のつながりを深めている。

このように，ひと工夫によって活動の効果が地域に波及し，メリットが生まれることも，活性化の視点のひとつとした。

「持続可能な活動」

研修委員会で議論を重ねるうち，地域の活動をどうやって今後つなげていくかというところがしばしば話題に挙がった。特に地域の伝統芸能等の団体では，後継者不足が顕著な問題として現れている。後継者問題だけではない。補助金を使ったイベント等を開催していたが補助金が無くなり開催出来なくなった，資金が集められず団体が存続出来なくなった等の資金の問題，一時期は皆を引っ張ってくれるリーダーがいたがその人が体調を崩して会自体が休止してしまう等のリーダーの問題など，地域での活動を存続していくにはいろいろな問題を乗り越えなければならない。

上で述べたように，地域での活動はそこに住む子供達の人との関わりを増やす場としても，将来地域を担っていく人材育成の場としても必要な活動である。人との関わりの場，人材育成の場である地域での活動が持続出来なくなるということは，地域それ自体が持続出来なくなるという問題に直結してくる。

今後，少子高齢化が進むことは既に分かっている中で，活動の内容は地域にとって必要不可欠なものに限られてくるだろう。限られてきても尚，活動の持続可能性という問題は常について回ることとなろうとは，容易に想像ができる。きらりよしじまでは，地区の公民館を地区の拠点として様々な活動が出来るよう，地区交流センターに移行した際に，公民館・社会教育の機能を指定管理の要件に入れたといい，さらに各専門部会に教育部門がある。高橋事務局長は，「地域の人材は地域で育成する責任がある。人づくりは地域の課題。人材育成が担保されていないコミュニティセンター化はメリットがない。」と話していた。その理念のもと，組織の中に中高生や若い世代を体系化し，地域の活動を担う経験をさせている。周りの住民に認められ，応援されて人が育つ仕組みができ，その結果多くの若い世代が地域で日常的に活動している。

持続可能な地域づくりを目指すうえで，我々がこれまでに挙げた地域活性化の視点を活かすことも出来るのではないだろうか。地域活動へ興味のない人の参加を促し，その中で人との関わりを増やすことを通じて，地域の人材を地域で育成していくことで後継者，担い手問題を持続可能なものとする。先頭に立って地域を牽引するリーダーが必要な地域なら，それを意識して人材育成を計画的に行うことが必要となってくる。それぞれの団体や地区のことばかりでなく，活動の効果を地域へ波及させることを意識して，他とのコラボレーションや事業の集約を行っていくことで，負担は少なくなり，資金面で活動を持続可能なものとすることが出来る。様々な面で持続可能性を意識すること，地域の現状を把握することで，活動に工夫が出来るのである。

ただ，実際に地域で活動する人たちがその部分に着目するに至らないことも多々あると感じている。我々社会教育主事は地域の様々な団体，活動に日頃から接する機会も多い。その中で我々が出来ることは何だろうか。どの団体，どの地区でも悩みの多い地域活動に持続可能な活動を目指すヒント，我々が見つけた視点を活動している当事者が自ら見つけ，気づけるように仕掛け，支援していくのが我々の仕事なのではないだろうか。

次の章では，我々が働く仙南二市七町において，実際に行っている活動や事業に，「興味のない人の参加が増えること」「人との関わりが増えること」「活動の効果が地域へ波及するもの」の３つの視点から「プラスワン」の工夫をして持続可能な地域活性化を目指す案を示すこととした。これらをモデルとし，日々の事業への工夫，地域の活動への提案として活かしていきたいと考える。

モ　デ　ル　事　業

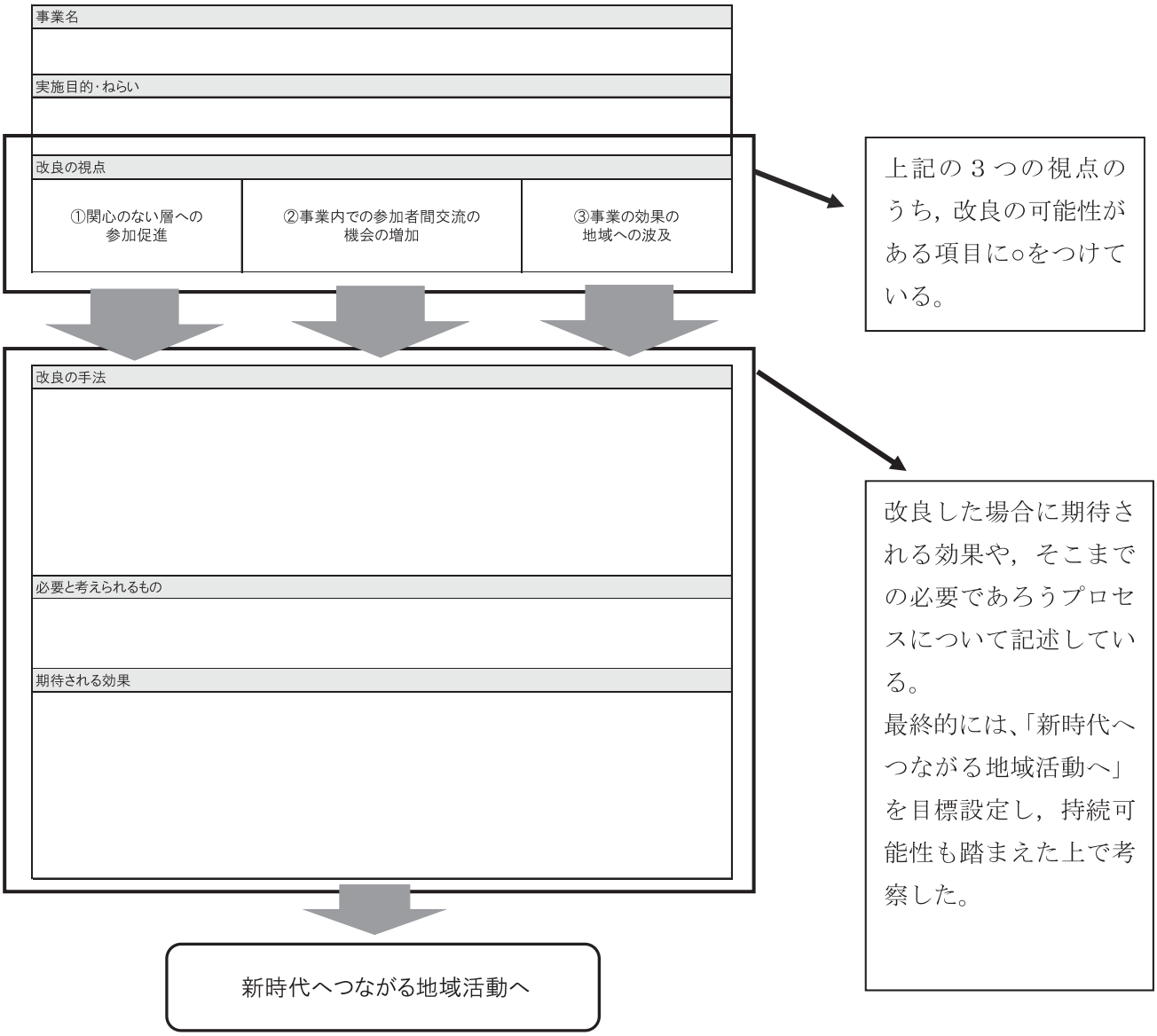
【モデル事業】

前章にて，我々が考える地域活性化と，その達成のための手法を考察した。その中で，「持続可能な地域活性化」を目指すために，「興味のない人の参加が増えること」「人との関わりが増えること」「活動の効果が地域で波及するもの」の３つの視点での工夫が大切だと認識した。そこで本章では，各市町が現在行っている事業に上記の視点を加え，改良の提案をする「プラスワン事業」を紹介したい。以下にて，本章の見方を参照いただき，今後の事業計画や運営に役立てていただければ幸いである。

○事業について

（１）柴田町子どもフェスティバル【柴田町】
（２）リフレッシュ♪Mama Café 【蔵王町】
（３）夏休み小学生スポーツ大会　【大河原町】
（４）イキイキ楽習ポイント事業　【村田町】

○プラスワン提案シートについて



事業名	
柴田町子どもフェスティバル	
実施目的・ねらい	
柴田町の子供（主として小学生）が一堂に会し，さまざまな遊びを体験することで，子供が人と関わることを学び，地域の垣根を超えた子供同士の交流を図ることを目的とします。また，本事業への参加を通じて，子ども会活動の重要性や地域の青少年健全育成意識を育てることを目的とする。	
主催・共催・主管	
主催　柴田町子ども会育成会連絡協議会，柴田町，柴田町教育委員会 主管　柴田町子どもフェスティバル実行委員会（各地区子ども会育成会から3名程度選出,事務局は生涯学習課）	
開催時期	**開催場所**
平成30年10月28日（日）	柴田町農村環境改善センター
対象	**参加者数**
柴田町の小学生	517人
告知方法	
○チラシ：柴田町内の小学校全児童への配布，「子育て・親育ち講座」参加者（未就学児の保護者），行政区回覧 ○ポスター：柴田町内全小学校・社会教育施設・町立の幼稚園や保育所・2市7町教育委員会 ○柴田町の広報誌やホームページに掲載	
事業内容	
○地区子ども会による「遊びの出店」コーナー：出店を回ったり，店番をすることでスタンプが溜まる❝スタンプラリー❞を取り入れ，各出店を周遊する流れをつくる。 ○昔遊びコーナー：けん玉やお手玉など，懐かしいおもちゃの遊び方を教えながら異世代交流を図る。 ※具体的なイベント内容及びスケジュール等の詳細は実行委員会で協議，決定する。	
成果・効果（地域に対しての影響や参加者の変化など）	
町内の小学生を対象とした子どもフェスティバルは，回数を重ねるごとに事業の認知度や内容の充実が図られてきている。	
課題	
平成30年度で第8回目を迎え，毎年一部のプログラムを変更して実施してきたが，事業のマンネリ化が懸念されている。	
写真	

ブース運営の様子

ブース運営の様子

【柴田町】

事業名		
柴田町子どもフェスティバル		
実施目的・ねらい		
柴田町の子供（主として小学生）が一堂に会し，さまざまな遊びを体験することで，子供が人と関わることを学び，地域の垣根を超えた子供同士の交流を図ることを目的とする。また，本事業への参加を通じて，子ども会活動の重要性や地域の青少年健全育成意識を育てることを目的とする。		
改良の視点		
①関心のない層への参加促進	②事業内での参加者間交流の機会の増加	③事業の効果の地域への波及

改良の手法

①開催場所を町の中央に近い場所に変更

②保護者同士や子供と保護者が交流できるブースの増加

必要と考えられるもの

①保護者同士や子供と保護者の交流の機会の企画・立案
②町内外へ向けた情報発信

期待される効果

①参加者の増加による交流の機会の増加
　町の中心部の生涯学習センターや公民館で開催することで，送迎の保護者や自転車で来ることができる中学生など参加者が増加し，異年齢交流の機会が増えることが期待される。

②異年齢・異世代交流の増加による地域や事業への関心の向上
　普段関わることのない地域の大人や中学生と関わることで，地域への関心が高まり，愛着形成を図るとともに，事業の継続性にも良い影響が与えられると考えられる。

新時代へつながる地域活動へ

事業名	
リフレッシュ♪Mama Café	
実施目的・ねらい	
日々，子育てや家事に忙しい母親たちの気分転換の時間を設ける。 また，参加者相互で子育て等の情報交換や共通理解をとおし，母親たちの心の負担を減らし，楽しく育児に取り組むための手助けになるような時間や機会を提供する。	
主催・共催・主管	
主催　蔵王町公民館	
開催時期	開催場所
年4回（6月～翌年2月の間）	蔵王町ふるさと文化会館
対象	参加者数
子育て中の母親	延べ98名（保護者43名，子供55名）
告知方法	
生涯学習課だよりへの掲載（全戸配布），町内公共施設へのチラシ設置，前回参加者への声掛け　ほか	
事業内容	
第1回　こねこね石鹸づくり，子育てサポーターとの交流　　第2回　和菓子づくり教室，子育てサポーターとの交流 第3回　親子でミニ運動会，絵本の読み聞かせ　　第4回　ミニひな人形づくり，子育てサポーターとの交流	
成果・効果（地域に対しての影響や参加者の変化など）	
講座実施中，参加者同士は育児から手を離し，趣味などの世間話をしている。講座終了後には，お茶をしながら，託児していた子供の様子や，自分が抱えている子育てへの相談などを町の子育てサポーターの方々と交わし，不安などの解消に寄与しているとともに，地域内でのつながりが生まれている。参加者からも「この事業は次世代までも継続していただきたい」と好評を得ている。	
課題	
参加定員に達することも多い講座であるが，告知方法が一定のため同一の参加者ばかりが参加している傾向にある。開催内容についてはこれまで主催者が行ってきたが，5年間継続している事業ということもあり，類似した内容が増えている。また，講師を要する内容の講座は，町外在住の方に依頼することも多くあり，地域内の人材を活用することはあまりできていない。	
写真	

講座の参加者

託児

講座終了後のお茶会

事業名
リフレッシュ♪Mama Café
実施目的・ねらい
日々，子育てや家事に忙しい母親たちの気分転換の時間を設ける。 また，参加者相互で子育て等の情報交換や共通理解をとおし，母親たちの心の負担を減らし，楽しく育児に取り組むための手助けになるような時間や機会を提供する。
改良の視点

①関心のない層への参加促進	②事業内での参加者間交流の機会の増加	③事業の効果の地域への波及

改良の手法

①講座の募集に，地域で子育てをすることの重要性を普及・啓発する内容を盛り込み，講座に参加する意味を理解してもらい，関心を持ってもらう。

②講座終了後に参加者で集まることができる機会の提供

必要と考えられるもの

①募集チラシ
②事業の参加者による口コミの強化

期待される効果

①新たな層の参加促進
現在講座への参加者は地域ぐるみでの子育てにある程度理解・関心がある層なため，講座には積極的に参加している。地域での子育ての重要性をより広く認識してもらい，子育てに対して本講座が有効であることを知ってもらうことで新たな参加者の獲得につながることが期待される。

②講座でできたつながりや関係性の持続
講座終了後に再度参加者で集まり，話をしたりする機会を作ることで，講座でできたつながりを持続することができ，母親たちの気分転換の場を認知させるきっかけに結びつくことが期待される。

新時代へつながる地域活動へ

事業名	
夏休み小学生スポーツ大会	
実施目的・ねらい	
夏休み期間におけるスポーツに親しむ機会の創出により，スポーツ人口の底辺拡大と小学生の体力増進に寄与し，地区内外の交流・親睦を通じて，小学生の健全育成に資することを目的とする。	
開催時期	開催場所
平成30年8月4日（土）	大河原町総合体育館
対象	参加者数
町内小学生	14行政区・延べ27チーム・参加児童数284人
告知方法	
・広報紙での周知 ・行政区長・地区PTA会長・地区育成会会長・地区スポーツ推進協力員へ直接通知発送	
事業内容	
行政区ごとにチーム編成をし，長なわとびと10人11脚の2種目でそれぞれ競技をし，順位をつける。長なわとびは飛んだ回数，10人11脚は完走タイムで順位を決定する。	
成果・効果（地域に対しての影響や参加者の変化など）	
参加行政区は，大会までの夏休み期間中に朝のラジオ体操の時間を活用し，競技の練習をしている。そのため，大会当日には，行政区の大人も子供も一体となり大会に挑んでいることが伺える。また，大会に対する保護者の熱意も強く，地域の子供を育てる雰囲気が醸成されていると考えられ，地域コミュニティの存続や活性化の一要素をなっている。	
課題	
大会開催当初から，参加している行政区は大河原小学校・大河原南小学校学区のみであり，金ケ瀬小学校学区からの参加がない。	
写真	

10人11脚

長縄跳び

【大河原町】

事業名		
夏休み小学生スポーツ大会		
実施目的・ねらい		
夏休み期間におけるスポーツに親しむ機会の創出により，スポーツ人口の底辺拡大と小学生の体力増進に寄与し，地区内外の交流・親睦を通じて，小学生の健全育成に資することを目的とする。		
改良の視点		
①関心のない層への参加促進	②事業内での参加者間交流の機会の増加	③事業の効果の地域への波及

改良の手法

金ケ瀬小学校区の地区の参加のアプローチをし，実際に金ケ瀬小学校区に大会参加をしてもらう。

必要と考えられるもの

①練習時間の確保
②大会に対する認知度の向上

期待される効果

①学区間交流の活性化
現在参加している大河原小学校区と大河原南小学校区に加え，金ケ瀬小学校区も参加すれば，町内のすべての小学校区が集まることになり，競技を通して，普段交流できない学区間の交流が活発になると考えられる。

②地区コミュニティの強化
参加している行政区が練習や大会を通して，親睦を深めたり，他の子供の指導をしたりすることでコミュニティを強化していることは現在でも伺える。金ケ瀬小学校区にも同様の効果を得られることが期待される。

新時代へつながる地域活動へ

事業名	
イキイキ楽習ポイント事業	
実施目的・ねらい	
小学生を対象に実施する体験事業や学習講座に「楽習ポイント」を設け，楽しく学べる学習機会を提供することで子供たちの学ぶことへの動機づけや意欲の向上を図る。	
主催・共催・主管	
主催：村田町教育委員会生涯学習課	
開催時期	**開催場所**
通年	各事業実施会場
対象	**参加者数**
町内小学生	202名（平成29年度実績）
告知方法	
チラシ，町ホームページ，フェイスブック	

事業内容

①教育委員会が主催する少年教育事業に楽習ポイントを設ける。
②子供たちは講座や体験活動に参加し，学習することで楽習ポイントを取得することができる。
③楽習ポイントは，教育委員会が発行するポイントカードで管理を行う。また，事業参加者のポイント取得状況について，事務局にてデータ管理を行う。
④子供たちが関心や目的を持って学習に取り組めるよう「目標ポイント」を設定する。目標ポイントは，「10ポイント」「20ポイント」「パーフェクト賞（全参加）」の3段階を設定する。
⑤目標ポイント達成者には，各小学校をとおして各ポイント達成賞と記念品を贈呈する。

【対象講座・体験活動】
①第1回サイエンスクラブ（全学年対象）
②第2回サイエンスクラブ（下学年対象）
③第3回サイエンスクラブ（上学年対象）
④第1回天体観測講座
⑤第2回天体観測講座
⑥親子ハイキング
⑦夏の子ども村キャンプ
⑧布袋まつり
⑨マボック発表会（ジュニア・リーダー主催クリスマス会）
⑩七夕飾りを作ろう
⑪常夜灯に絵を描こう！！
⑫小正月行事を体験してみよう

成果・効果（地域に対しての影響や参加者の変化など）

当事業の実施により，各少年教育事業への参加者数が増加しており，地域における学習活動に対する意欲の向上につながっている。

課題

現状では，ポイント獲得の対象が教育委員会主催の事業に限定されていることから，地域独自の事業等との連携を図れば，子供たちの地域活動に対するさらなる意識の向上が期待できるものと考える。

写真

夏の子ども村キャンプ

布袋まつり（山車の引き手）

小学校での達成賞・記念品贈呈の様子

【村田町】

事業名
イキイキ楽習ポイント事業
実施目的・ねらい
小学生を対象に実施する体験事業や学習講座に「楽習ポイント」を設け，楽しく学べる学習機会を提供することで子供たちの学ぶことへの動機づけや意欲の向上を図る。
改良の視点

①関心のない層への参加促進	②事業内での参加者間交流の機会の増加	③事業の効果の地域への波及

改良の手法
イキイキ楽習ポイントの対象事業を，教育委員会主催の少年教育事業だけではなく，あらかじめ設定した地域活動（地区清掃や親子会行事）に拡充する。
必要と考えられるもの
①子供が参加できる地域活動の企画・立案 ②地域の理解を得る
期待される効果
①子供の地域活動の参加意欲の向上 ポイント取得の条件を地域活動にも拡充することで，子供たちの地域活動の参加意欲も向上する。また，親子で参加できるような地域活動であれば，他家族との交流も図ることもでき，地域活動をする「大人の背中」を自然に見せることが可能となるため，地域活動の継続性を強化できる一因になるのではないか。 ②大人の地域への関心の向上 自分の子供が地域活動に参加することで，自然と親や地域住民たちの関心も向上することが予想される。子供が参加する事業をより充実したものにするために大人が地域に目を向けることも多くなり，事業が地域に波及されると考えられる。

新時代へつながる地域活動へ

先 進 地 研 修 視 察 報 告

平成３０年度　大河原地区社会教育主事研究協議会先進地研修視察要項

１　目　的　　生涯学習の充実が求められる今日，その先進地を視察することにより，管内の各市町における今後の生涯学習及び社会教育推進に役立てるとともに，社会教育主事としての資質の向上と豊かな発想力を培う。

２　期　日　　平成３０年９月１１日（火）

３　視察先　　山形県東置賜郡高畠町　二井宿地区公民館
山形県東置賜郡川西町　きらりよしじまネットワーク

４　会　場　　研修１：高畠町　二井宿地区公民館
所在地：山形県東置賜郡高畠町二井宿２７９６

研修２：川西町　吉島地区交流センター
所在地：山形県東置賜郡川西町吉田５８８６－１

５　日程等　　８：１５　大河原合同庁舎　集合
８：２０　　〃　　発
９：１０　七ヶ宿町公民館　着・発
１０：００　高畠町　二井宿地区公民館
【研修１】地域に根ざした公民館活動について
講話・質疑応答：公民館職員
１１：３０　昼食・休憩・移動
１３：００　川西町　吉島地区交流センター
【研修２】住民全世帯が加入するNPO法人活動について
講話・質疑応答：きらりよしじまネットワーク職員
１５：１０　発
１５：４０　七ヶ宿町公民館着・発
１６：３０　大河原合同庁舎　到着・解散

６　参加者　　大河原地区社会教育主事研究協議会会員及び社会教育関係職員等

〈研修１〉二井宿地区公民館について
山形県高畠町二井宿地区公民館　館長　神保　一雄　氏

○平成２４年１２月の講演会が引き金となり，平成２５年３月に「二井宿の将来・夢を語り合う会」が立ち上がった。食事をしながら地域の話題について話し合うもので，公民館はこの会の話し合いで出たことをバックアップしていた。

○平成２６年１１月に「二井宿わくわくプロジェクト」を設立。会長が変わると後継者が育たない，継続性がないことから充て職を充てず有志の組織とした。設立までの 1 年半の間に数回の会議を行い，住民の夢を膨らませる期間とした。プロジェクトは「できることから」をモットーに行っている。

○わくわくプロジェクトを構成する４つの専門部会のうちの一つである「青少年育成部」では，「地域の子供は地域で守る」ことを目標として活動している。具体的な取組みとして，山登りをしながら歴史を勉強する事業やおちゃ子屋，ピザ窯づくりプロジェクトなどを行っている。「おちゃ子屋」とは，「お茶飲み」と「寺子屋」を合わせたもので，地域の大人たちが子供の遊び相手となったり，勉強を教えたりするものである。東北芸術工科大学の学生がフィールドワークの一環として運営を始めた。「地域の子供の顔が見えない。特に，中学生以上は地域に出て来ない」という問題を改善するために考えられた取組みである。中学生は部活等で多忙だが，活動の中での大学生の声掛けにより，スケジュールを割いて来る子も少なくない。現在は芸工大生による運営が終了し，住民が引継ぐ形で行われている。芸工大生もサークル活動として協力している。「ピザ窯づくりプロジェクト」は，地域おこし協力隊が中心となり，住民交流の場としてピザ窯を作製する事業である。完成後は地域からのリクエストにより，ピザ窯を活用した婚活イベントが開催された。

○公民館長は，プロジェクトの活動について新聞や講演会等で積極的に情報発信している。外部からの評価は，メンバーのやりがいややる気につながっている。また，地域おこし協力隊のネットワークを生かし，いろいろなところに情報発信することも大切である。

○地域は「子供からお年寄りまで安心・安全」であることが何よりも大事である。まずは住民がどうすればそのような地域になるのかを考える場を設けることが，地域づくりのきっかけとなる。

○わくわくプロジェクトのおかげで地区外や町外までつながりが広がっている。公民館は人々が集まる場や地域を考える機会をつくって人々をつなげること，そして住民が主導となって行えるようにサポートしていくことが大切である。

○質疑

Q：地区振興協議会のようなものはあるのか

A：ないが，区長会などの組織を公民館がサポートしている。団体を掛け持ちしている人もいたため，課題などの共有ができていた。

Q：公民館運営委員会について

A：委員は充て職。構成員は自治公民館長，小学校長，青少年推進員，スポーツ推進委員など。メンバーの地区や性別のバランスをみながら，一本釣りで選出している。地域のニーズに対し，公民館としてどう対応すべきか意見を聞きながら事業を展開している。

Q：次世代の育成と今後の展望について

A：おちゃ子屋には，小学生は参加するが中学生になると忙しくなって地域に出てこない。小学生から高校生がつながれる仕組みづくりを考えている。地区の文化祭で中学生の企画を入れたり，運動会の

手伝いをしてもらっている。大人は消防団などに所属していなければ地域とのつながりがない。「ピザ窯づくりプロジェクト」などのような地域おこし協力隊の活動を見て，地域に出て来る若者は少なからずいる。若者は若者同士，年の近い人と一緒にやると上手くいくのかもしれない。協力隊が声を掛けることで，若者からやりたいことの提案がたくさん出てくる。

今後の課題として，次世代の育成と地域活動の継承，自主・自立の活動と運営などがある。わくわくプロジェクトに参加している５０名は，「ここに住んでいる誇り」と「地域をこうしたいという気持ち」を持っている人たちである。今後は広範な住民への活動参加の機会づくりをしたいと思っている。

〈研修２〉きらりよしじまネットワークについて
特定非営利活動法人　きらりよしじまネットワーク　事務局長　高橋　由和　氏

○平成１４年に町の地区公民館が公設民営化したのをきっかけに，地区の再生案を検討し始め，平成１６年に地域の各種団体を一元化し，全世帯加入のＮＰＯ法人化を提案。平成１８年に地区公民館の指定管理を受託。ワークショップを重ね，法人格を取得するまで住民との信頼関係の構築に努めた。

○地域の様々な事業の拠点となるよう，コミュニティセンター化。ただし，首長部局でコミュニティセンター化しても公民館・社会教育の機能を担保するため，指定管理の要件に入れている。小規模多機能自治の考え方のもと，複層的課題解決を目指して地域の運営を行っている。

○地域の人材育成は地域課題であるから，地域で育成すべきという考えのもと，地域の住民の中で認められ，応援されて人が育つしくみがある。愛郷心というのは，暮らしの課題を自ら解決していく中で育まれるもの。そこに欠かせないのが学び。きらりでは様々な学びの機会がある。ワークショップ等を通して，地域の現状を知る。総合計画の勉強会もある。全ての事業にチェックシートがあり，普通の住民がＰＤＣＡを回せる仕組みが出来ている。それぞれの年代に合わせてスタート地点を変えたり等工夫して全ての住民がマネジメントやマーケティングを学ぶことが出来る。また，小学生のうちから地域の中で様々なチームでの活動がある。その中で子供たちはチームビルディングを学んでいく。専門部会では，自治会から推薦される若者が２年間地域活動に参加し，その中でいろいろなことを学んだ上で自治会に戻り地域の活動に加わる仕組みや，きらりでの地域経営に参加出来るようになる仕組みがある。

○地域のいろいろな世代が相互に関わり，学校の空き教室を利用したデイサービス（教育×福祉），子供たちによる高齢者の見守り，若者主体の活動と高齢者の所得向上の取り組みを一緒にする等地域に参加出来る仕掛けを様々な部門で作っている。

○若い世代が参加してこないという問題がどこでも聞かれるが，地域活動がいかにステータスであるかということを認識させることを意識している。「子褒めの日」の設定や，参加しただけで褒められる環境，自分たちの意見が通る経験をさせることで，地域活動で満足を得ることが出来，そうした経験をした子供たちが他の子を連れてくるという循環が出来ている。また，グループで活動させる中にコアリーダーという役割があり，意識して友人等を連れてくるようにもなる。

○質疑

Q：（研修中，中学生がお茶出しをしてくれる場面があり）中学生がお茶を振る舞うのは？

A：中学校のキャリア教育の受け入れで，全部地元の子供たち。3年生の時はすべて関わっている子供たちで，今の時間は学童も関わっている。

Q：きらりがあるよしじまで生まれ育って，義務教育が終わる子供たちが出てくるような環境になりつつありどうか？地域の大人の動きであるとか，夜に集まって思っていることをぶつけ合う，そのシーンを垣間見る。分かりやすく言うと，大人の背中を見る，親とか先生だけでなく地域の大人の背中を見る機会がものすごく，子供たちの中に取り込まれるのかなと思う。人数は少ないと思うが，ほとんどの大人の背中を子供たちが見られる環境があるというのはどうか？

A：私たちも小さいときに身近な大人から言われた言葉や行動が印象に残っていることがあった。やはり，あのような体験，日常的な世代間のコミュニケーションが無いと得られないと思う。あとは，学校との連携。子供たちを介して親や祖父母を巻き込むこと。子供たちが大きくなって，子供がいないから子育て支援には関わらないではなく，自分の子供もそのように育ててきたのだから，それを共有する

場所を作らなければだめだと思う。子供がいなくても，手伝ってという，それがワークショップの場であったりする。

Q : ワークショップは，今，働いている現役のお父さん，お母さん等，いわゆる現役の忙しい人たちでも，みんな参加して，子供たちにとって何が必要か，そういった内容について共有できているのがすごいと思う。

A : 学校支援本部を立ち上げて，保護者の集まりなどと連携して，交流ワークショップをやったり，学校でワークショップをやったりした。学童保育も保護者の意見が始まりで，地域に学童があるといいねという話があって，最初，子育て中の家庭に全部アンケートを取って，はじめに５０人位入りたいという結果が出たので，これは，経営として成り立つと，それではやってみましょうとスタートしたら，最初は１５人しか入らず，それから他の学童と違いを出すため，学習指導はもちろん，中学生だったら宿題を見てやったり，保育児の預かり時間を夜遅くまでにしたり，片親の親御さんが家に帰って食事を作るのが大変なので，地域のおばさんたちにお惣菜を作っていただいて，お迎えに来た時にお渡しするというようなことをやっている。地域づくりの中で，きちんと子供が産めて育てられる環境，どう支援するか，子供がいないからといって町に任せればいいというのではなくて，将来人口が減っていく中で，若い女性の方々が来てくれて，地元の若い連中と結ばれて子育てした時に地域としてどういう支援ができているか，それが住んでもらえる地域だと思う。

Q : 私たちが社会教育でやる場づくりとして，学校と連携してその保護者の集まりとぶつけてみんな自動的に参加しているということになって，そういう場の設定の工夫があったと思う。

A : 学校支援本部の考え方も，コミュニティスクールとしても，学校経営にどれだけコミュニティが参加するか，という部分でそういう制度が立ち上がってきているが，学校長の理解も必要。学校長がちゃんとそれを理解して，住民の声が反映できる開かれた学校づくりを地域とやることによって，いわゆる学校経営のコストも下がるだろうし，あるいは，先生方の負担が軽減されるだろうし，うちは，学校，地域活動に学校の先生方の参加をいっさい呼びかけしていない。先生方も地域に戻ったら自分の地域内でやってくださいとお願いしている。逆に気になって，先生方の方が見に来ている。普段から学校と話をして，国際交流やスポーツ等で相互に連携をしている。学校の弱い所も，地域の弱い所もお互いに話し合う場がないと連携は出来ない。地域福祉の事業は，総合の時間に６年生を対象にしてやっている。６年生に福祉って何だっけ？と聞くと，普段の暮らしを幸せにする，と返ってくる。小学校を卒業した福祉の現場で働いている先輩をそこにアテンドしてやっているので，自分も福祉の仕事をやりたいな，という子供も，卒業して，職に就いている子供もいる。

Q : NPO の全戸加入というところで，いまだに何もないか？皆受け入れているのか？

A : NPO 法人活動に対しては基本的にお金をいただいている。あるいは，他の団体がお金を出せないところとか，自治会の判断で会費の減免があるので，お金を払っていなくても指定登録ができる。片親世帯とかは，払えるようになったら，払えばいい。ただサービスはみんなにも，あれは住民の皆さんでも企業の皆さんでもお金がある人がお金を出して，いわゆる大変な人をお手伝いしましょうということで，基金を立ち上げている。その基金を使って事業をやったりしている。冒頭に言いましたが，村の再生。一つの国の考え方，地域もそういう国づくりをやらなければならないと思う。そこに，学校はどう関わるか，話し合いの場があるか，バラバラに動いていいことをやっているのだから，客観的に繋ぎ合わせる，コーディネートするところがないと，それを誰がするのか，という話になるが，

公民館の再生。公民館を社会教育的視点で人のつながり，講座・研修を通じて人材育成をやっていることを考えれば，より身近な生活に関わるような研修，プログラムを作らなければならないと思う。あるいは，教育という分野だけではなく，儲けるための学びの現場があってもいいと思う。人を支えるための学びの場があってもいいと思う。社会教育の枠が広がっていかなければならない。うちの地域は社会教育による地域づくりをうたっていいと思う。いろんな学びの場があって，それを住民自らが実践していく，それでは，教育委員会はそれに対しての支援，首長部局としては活動に対してどのような支援ができるのか，という二つの方向性があってもいい。

Q：川西町の他の地区で，よしじまモデルで進めていこうという所は？特に教育部門を聞きたい。

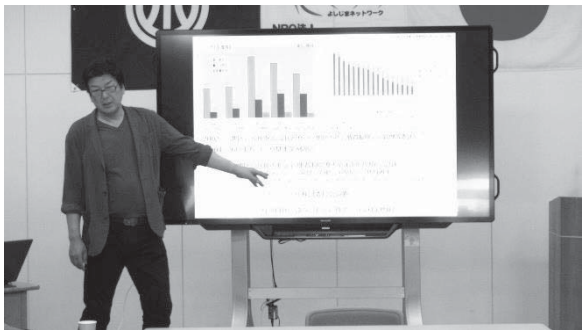
A：最初は町の方も独自性のある組織を作ってくださいということだったが，なかなかその組み立てが分からない。よしじまの活動の紹介をして，最初はなぜきらりよしじまのようにやらなければならないのか，法人を作らなければ。うちは学童が欲しいとか，産直やってみたいとか，立ち上げの時にメディアをどんどん使って情報を公開した。地域の人々の当事者意識を高めるために外から評価してくれるという環境設定のためにメディアをどんどん使って，この前テレビ見たよ，よしじまってすごいね，という他の声が聞こえてきてそれからよしじまも他の地区に出向いてワークショップを設計から運営までお手伝いしたり，部会の構成とか，お手伝いして，指定管理がＯＫの時には，指定管理の要件ですが，普通は行政で作ると思うが，行政と共同で要件を作ってきた。だから，社会教育はお金が担保されている。子供たちの学習活動も地域でやっているし，学童も５地区でやっている。全部民設民営。

Q：課題の共有化ということで，特にやっていることは？

A：一番最初にやったのは，住民に川西町の総合計画の勉強会，住民が計画について学ぶ，いわゆる理想像があって，エビデンスを理解しないと，役所の職員も住民に分かりやすく説明しなければならないので勉強しなければならない。役所が抱える理想像と地域が抱える理想像に差はないと思いますが，課題に対してこのような施策を講じていることになれば，住民も理解しやすくなると思う。地域でも同じレベルの行政課題とコミュニティ課題との同じではないかと勉強できる，そういう意味では役所の職員がとてもカッコ良くなる。うちのスタッフには，役場の職員が７人入っているので，町の情報も早い。役場の中の主査級とかも主幹クラスもいる。

Q：地域活動への子供たちの関わり方は？大事にしているところとは？

A：地域活動がいかにステータスであるかという見せ方。子供たちが関わっている活動は，もちろん親御さんの了解も必要だが，公開できるものはすべて公開して，周りが褒めるという環境を整える。昔は，子褒めの日を決めていた。第二，第四水曜日。地域の中で頑張っていることを皆さん褒めましょう。子供たちも地域の人々が見てるよ，地域づくりに関わっている人が教えてくれる。身近な先輩たちが活動を見せているし，話し合いの中で計画づくりも参加しているので，そういう手法がいつの間にか伝わって行く。その意見を受けて，自分たちの意見が通ると嬉しい経験になる。いかに地域の中で動く，関わるというのがステータスであるかを分からせるために，大人が褒めなくてはならない。みんなで決めたことをみんなでやるというのが大前提です。



＜参加者名簿＞

教育委員会等	職　名	氏　名	担　当
白石市	主事（社会教育主事）	※松本　志畝	
角田市	主査	荒井　菜津美	
	主事（社会教育主事）	※齋藤　史織	研修副委員長
蔵王町	社会教育主事	※梶原　一貴	
七ヶ宿町	主幹（社会教育主事）	※小掠　政光	
大河原町	主事（社会教育主事）	※石河　千宙	
村田町	主査（社会教育主事）	※岡本　健志	研修委員長
柴田町	船迫生涯学習センター副館長兼学習支援班長兼社会教育主事	木村　正人	会長
	主事	※渡辺　光	
川崎町	社会教育主事	※佐藤　克哉	
丸森町	参事兼課長補佐（社会教育主事）	齋藤　公男	
仙南地域広域行政事務組合教育委員会	主幹兼教育係長兼文化振興係長（社会教育主事）	※黒澤　良	副会長
大河原教育事務所	次長（社会教育主事）	小林　正道	
	主幹（社会教育主事）	※三浦　良人	

※は研修委員

ま　と　め

ま と め

今年度は，昨年度の研修テーマを引き継ぎ「青少年の地域活動に関する意識調査」の結果について分析と考察を行うことにした。

我々が昨年度の意識調査を行うにあたり課題として捉えた「生活環境（生活スタイル）の変化」「親の意識」の２つを解決するために家庭・地域・学校の視点から，分析と考察を今回の研修で実施し，その分析から得られた結果を各市町から持ち寄った既存事業をベースに反映させたモデル事業として，事業をそれぞれ立案した。

【アンケートの分析と考察】

昨年度行った「青少年の地域活動に関する意識調査」の結果をもとに得た課題「生活環境（生活スタイル）の変化」「親の意識」の２つを解決するために，家庭・地域・学校への働きかけが必要であり，クロス集計などを用いて，調査結果の分析と考察を行った。

１つ目の『家庭』では，「青少年の地域活動に関する意識調査」で，保護者だけでなく生徒も余暇時間に勉強や部活が忙しく，地域活動に参加する時間が取りにくい生徒が多い状況ではあった。だが，生徒及び保護者ともに地域活動に対する前向きな意見や地域に対する愛着は強く，地域活動には肯定的な考えを持っていることが分かった。今回の分析で生徒の地域活動への参加のきっかけとして，他者からの影響が大きいことが分かった。保護者が活動へ参加することで子供に親の背中を見せること，さらに子供の背中を押すことが地域活動への参加のきっかけになるのではないだろうか。

２つ目の『地域』では，生徒の中で地域活動に参加していない理由として情報がないという回答が多く，子供に対する地域活動などの情報発信の工夫が必要であることが分かった。また，若い世代や移住者といった新しく地域に入った保護者が意見しやすい環境づくりに努めることも重要であると考えられる。

３つ目の『学校』では，生徒が地域活動に参加した経緯の多くが他者からの影響が多く，その中には「学校行事だった」「部活動でることになった」という回答もあった。学校活動として地域の行事に参加し，学校と地域が直接的につながることが地域活動に触れる機会を増やすきっかけになると感じた。

上記の家庭・地域・学校において分析を行ったところ，地域活動の活性化について「興味のない人の参加が増えること」「人との関わりが増えること」「活動の効果が地域全体へ波及するもの」の３つの視点が浮かび上がってきた。また，目指すべきところとして「持続可能な活動」というキーワードが資金面，後継者の育成等の全てを含む意味で重要であると考えた。

【モデル事業】

「青少年の地域活動に関する意識調査」をもとに我々が分析を行ったところ，住民が歩み寄るのを待つのではなく，我々が住民に働きかけることが必要であり，既存事業の見直しが必要であることが分かった。今回意識調査の分析及び考察をもとに各市町の既存事業をベースとし，「関心のない層への参加促進」「事業内の参加者間交流の機会増加」「事業の効果の地域への波及」の３つの改良の視点に着目し，４つの既存事業に「改良の手法」「必要と考える策」「期待される効果」の３つの事項について検討を行い，地域で「持続可能な活動」につながる改善策として作成に取り組んだ。今回，取り上げられた事業の課題の改善策が各市町の事業を考えるための参考になればと思う。

今回，大河原地区社会教育主事研究協議会研修委員会では，「元気な地域づくりをめざして」をテーマに，２年にわたり地域活動の今後について調査と分析を行った。この報告書を参考に管内の地域活動の活性化に役立てていただければと思うが，社会教育・生涯学習に絶対的な答えは存在しない。常に変化する環境や住民のニーズに対応する事業展開が求められ，今の地域課題は何か，地域住民に何を伝えたいかを考えていく必要がある。

今回の研修報告書を読んだ皆様が昨年度と違う何かを取り入れて事業を行うことで，「新時代につながる地域活動」となる糸口になれば幸いである。

お　わ　り　に

お　わ　り　に

社会教育主事を発令され３年目。知識・経験ともに不十分な私にとって，研修委員長という大役への選出は，当初，不安な気持ちしかありませんでした。

しかし，研究協議会会員のみなさまからのご指導や，ともに研修に励んできた委員のみなさまからの支えにより，研修委員長としての任務を無事全うすることができましたこと，深く感謝申し上げます。

今回の研修は，地域活動をテーマに「元気な地域づくりをめざして」と題し，昨年度から２年計画で実施してきたものです。２市７町の中学校第２学年生徒及びその保護者を対象に昨年度行った地域活動に関する意識調査の結果をもとに，地域活動についての様々な課題を洗い出し，よりよい地域活動を行っていくための考察を行いました。

「地域活動」と一言で言っても，その内容は限りなく広く，課題解決のための答えも１つではありません。そのような中で，私たち研修委員は，社会教育の推進や生涯学習の振興に取り組む「社会教育主事」という専門的な立場から，これからの地域活動に必要だと思われることについて，自分たちなりに導き出すことができました。

そして，この研修をとおして，私たちは改めて「人と人とのつながり・世代間のつながり」の重要性を認識することができました。地域活動を活性化させていく上で，家庭・地域・学校の連携・協働は必要不可欠なものと考えます。一社会教育主事として，研修での経験を生かしながら，それぞれのコーディネート役を担っていくことも，本研修の大きな成果につながるのではないでしょうか。

最後になりますが，この研修報告書が一人でも多くの社会教育関係者にご一読いただき，地域活動活性化への一助となれば幸いです。また，報告書の発刊にあたり，ご支援・ご協力をいただきました多くのみなさまに厚く御礼を申し上げ，おわりのことばとさせていただきます。

平成３１年３月

平成３０年度 大河原地区社会教育主事研究協議会研修委員会
研修委員長　村田町社会教育主事　岡本　健志

【大河原地区社会教育主事研究協議会会員】

白石市社会教育主事	小野　輝彦	＊松本　志畝		
角田市社会教育主事	○齋藤　史織			
蔵王町社会教育主事	佐藤　洋一	上原　直美	＊梶原　一貴	
七ヶ宿町社会教育主事	＊小掠　政光			
大河原町社会教育主事	吾妻　晃次	＊石河　千宙		
村田町社会教育主事	◎岡本　健志			
柴田町社会教育主事	亀井　和招	髙橋　秀之	☆木村　正人	＊渡辺　光
川崎町社会教育主事	佐藤伸一郎	＊佐藤　克哉		
丸森町社会教育主事	齋藤　公男	＊荒井　優作		
仙南広域社会教育主事	◇黒澤　良			
大河原教育事務所	小林　正道	＊三浦　良人		

☆協議会会長
◇協議会副会長
◎研修委員長
○研修副委員長
＊研修委員

【平成３０年度　研修委員】

蔵王町　梶原　一貴
大河原町　石河　千宙
柴田町　渡辺　光
川崎町　佐藤　克哉
丸森町　荒井　優作
白石市　松本　志畝

教育事務所　三浦　良人
仙南広域　黒澤　良
研修委員長　村田町　岡本　健志
研修副委員長　角田市　齋藤　史織
七ヶ宿町　小掠　政光

研修報告書　第45号

元気な地域づくりをめざしてⅡ

～新時代へつながる地域活動とは～

平成３１年３月３１日発行
編集／大河原地区社会教育主事研究協議会研修委員会
発行／大河原地区社会教育主事研究協議会
印刷／株式会社　津田印刷

研修委員会のあゆみ【これまでの研修報告書一覧】

No	年度	タ　イ　ト　ル	研修代表者		
1	S48	宮城県における父母教師会活動に関する実態　－調査報告書－	県教育部長会編，社会教育主事担当		
2	S49	仙南地域における母親の幼児教育に関する実態 ～3･4歳児を第一子に持つ母親～　調査報告書	研修班長	白石市 白石市	太齋　　亨 伏見　光龍
3	S50	乳幼児教育の学習内容の研究　～学習計画立案のために～	研修班長	白石市	伏見　光龍
4	S51	文化財保護行政をすすめるために	研修班長	丸森町	阿部　義郎
5	S52	生涯教育を推進するために	研修班長	川崎町	髙山　惠弘
6	S53 S54	大河原教育事務所管内社会教育30年のあゆみ　～住民のこころに灯をともして～	研修班長	角田市 七ヶ宿町	咲間　庄三 根元　邦美
7	S55	学習プログラムの立案（婦人学級･高齢者教室･家庭教育学級）	研修班長	七ヶ宿町	根元　邦美
8	S56	青少年及び親の意識　調査報告書	研修班長	柴田町	澁谷　孝之
9	S57	社会教育推進上の諸問題と社会教育主事の果たす役割 ～教育委員会と公民館のあり方を中心として～	研修班長	角田市	齋藤　　久
10	S58	社会教育における学習内容を充実させるための工夫 ～視聴覚教材の効果的な活用をとおして～	研修班長	川崎町	大宮　　昭
11	S59	少年教育の充実をめざして　　～管内における現状と課題～	研修班長	白石市	佐藤　重仁
12	S60	青年教育の充実をめざして･Ⅰ　＝青年活動の実態＝	研修班長	丸森町	鈴木　悦郎
13	S61	青年教育の充実をめざして･Ⅱ　「青年の生活意識と余暇活動についての調査」報告書	研修班長	村田町	髙橋　徳夫
14	S62	青年教育の充実をめざして･Ⅲ　－青年教育事業の進め方を考える－	研修班長	角田市	大友　喜助
15	S63	スポーツ人口の拡大を図る一方策　高齢者向けニュースポーツの開発を通して	研修班長	大河原町	佐々木寿信
16	H元	スポーツ人口の拡大を図る一方策Ⅱ　高齢者向けニュースポーツの普及を通して	研修班長	角田市	太田　文夫
17	H2	大河原教育事務所管内社会教育40年のあゆみ　新しい学習社会への架け橋	研修委員長	丸森町	岡崎　勝志
18	H3	生涯学習の鼓動　　青年･家庭･高齢者教育の充実をめざして	研修委員長	村田町	髙橋　定光
19	H4	生涯学習の鼓動part2　成人･少年･婦人教育の充実をめざして	研修委員長	大河原町	尾形　　彰
20	H5	学校週5日制と社会教育のあり方	研修委員長	川崎町	小林　志郎
21	H6	青年教育の充実をめざして･Ⅳ　－昭和61年度調査結果との比較･考察を通して－	研修委員長	蔵王町	日下　朝男
22	H7	生涯学習のまちづくりをめざして　生涯学習推進の現状と課題	研修委員長	村田町	山家　孝弘
23	H8	生涯学習の課題と展望　学社連携をめざして	研修委員長	白石市	小野　輝彦
24	H9	生涯学習の課題と展望　学社連携から学社融合へ	研修委員長	村田町	山家　孝弘
25	H10	生涯学習の課題と展望　よりよい公民館活動をめざして	研修委員長	蔵王町	砂金　　毅
26	H11	生涯学習の課題と展望　よりよい公民館活動をめざしてⅡ ～公民館入門－つどう･まなぶ･つながる～	研修委員長	大河原町	八島　良隆
27	H12	大河原教育事務所管内社会教育50年のあゆみ　新世紀･きえない虹をおいかけて	研修委員長	白石市	村上　忠敏
28	H13	学社融合の課題と展望　総合的な学習の時間における社会教育のアプローチ	研修委員長	七ヶ宿町	伊藤　貴子
29	H14	学社融合の課題と展望　学校教育と社会教育の協働をめざして	研修委員長	丸森町	菊地　浩二
30	H15	学社融合へのアプローチ　知って得する！文化財･その活用法	研修委員長	丸森町	伊藤　博道

研修委員会のあゆみ【これまでの研修報告書一覧】

No	年度	タ　イ　ト　ル	研修代表者		
31	H16	ヤング・エボリューション　～青年の意識調査をとおして、今の青年たちを考える～	研修委員長	大河原町	小野　宏
32	H17	ヤング・エボリューションⅡ　～青年教育の活性化をめざして～	研修委員長	村田町	鎌田　浩孝
33	H18	動き出した次世代育成支援　～これからの子育て支援の在り方を考える～	研修委員長	七ヶ宿町	髙橋慎太郎
34	H19	時代を映してきた視聴覚教育　～使ってみよう自作視聴覚教材～	研修委員長	角田市	八島　利美
35	H20	がんばってます！ジュニア・リーダー　～過去　現在　そして未来へ～	研修委員長	川崎町	村上　透
36	H21	生涯スポーツの振興をめざして　～総合型地域スポーツクラブの可能性をさぐる～	研修委員長	柴田町	大川原真一
37	H22	生涯スポーツの振興をめざして vol.Ⅱ ～仙南型総合スポーツクラブへのアプローチ～	研修委員長	白石市	小室　徹彦
38	H23	大河原教育事務所管内社会教育60年のあゆみ　～変わり続ける時代を生きる～	研修委員長	角田市	大内　克典
39	H24	協働教育推進へのアプローチ　～各市町の実践から見えたもの～	研修委員長	川崎町	冨田　丈靖
40	H25	これからの成人・高齢者教育を考える　～地域活動と学習に関する意識調査～	研修委員長	柴田町	加藤　栄一
41	H26	これからの成人・高齢者教育を考えるⅡ　～住民とともに豊かな学びをめざして～	研修委員長	大河原町	伊藤　敏之
42	H27	子育て・家庭教育支援の充実をめざして　～手と手をつなぐみんなのチカラ～	研修委員長	柴田町	木村　正人
43	H28	未来に伝えよう！地域の文化財　～社会教育的視点からのアプローチ～	研修委員長	川崎町	佐藤伸一郎
44	H29	元気な地域づくりをめざして　～青少年の地域活動に関する意識調査～	研修委員長	七ヶ宿町	小掠　政光
45	H30	元気な地域づくりをめざしてⅡ　～新時代へつながる地域活動とは～	研修委員長	村田町	岡本　健志